

## ◆ 家族と社会化研究の課題

## 家族社会学の解体と再生

山 田 昌 弘

## 1. はじめに

現在、「家族論」はおもしろい。家族社会学以外の社会学者，社会学者以外の学者，学者以外の文化人が，家族に関するおもしろい切り口を見つけたり，新しい傾向を発見したり，家族問題を発掘し，追求し，告発している。一方，家族社会学は，ちっともおもしろくない。十年一日のごとく同じようなフォーマットで調査が繰り返され，調査結果を主体とした「正しい」論文が大量生産されている。しかし，ちっともおもしろくない。

例えば，夫婦の役割分担に関する最近のフェミニズム（女性学）と家族社会学の議論を比べてみれば一目瞭然だ。伝統的家族社会学者は，平等意識とか実際の役割分担のみにこだわり続け，夫の家事手伝いを容認する割合が何％増えたといっっては喜び，夫の現実の家事分担時間が少ないといっっては憤慨する。一方，フェミニズムの論者たちは，資本制の発展との関係，家父長制との関係，国家との関係などから，表面的な役割意識や役割行動に還元されない夫婦関係の構造から微妙な感情的「あや」まで自由自在に論じている。

そう，「従来の伝統的家族社会学は，現代家族で生じている人々の経験を再構成するすべてを失っている」という思いに駆られる。

その理由は二つある。

一つは，従来の家族社会学が依拠していた前提が，現実の家族生活とずれてきた。「多様化」し，「個人化」し，「曖昧化」する家族生活の現実の中で，従来の家族社会

---

東京学芸大学

## 家族社会学の解体と再生

学の分析道具では手に負えなくなっている。

もう一つは、従来の家族社会学では、扱おうとしなかった現象が、家族にとって重要な意味を持つものとして、人々の関心を集めつつあるという事実だ。その一つは、家族生活の中で生じる「感情・意味」の世界である。

前者の欠点は、家族社会学の分析用具の細分化、厳密化によって切り抜けることができるかもしれない。しかし、後者の欠点は致命的である。人々が家族生活の中で、様々な思いを抱き、感情を体験し、そして行動している。例えば、「老親の世話」をする場合でも、「しかたなくする」「強制されてする」「楽しんでする」「打算的にする」場合では、個々人の体験・感情、そして、行動の内容、効果までもが異なってくる。従来の伝統的な家族社会学は、この問題に答えるすべを持っていない。それゆえ、現在、われわれが家族社会学のために必要としているのは、次の三つの作業だろう。

- ① 従来の伝統的家族社会学が当然のことと見なして依拠していた「諸前提」を明らかにし、批判的に検討する作業。
- ② 家族の現実に戻ること。人々が行っている家族実践、家族生活において感じる意味・感情の世界を「偏見」なしに記述する作業。
- ③ 現実の家族経験を「社会学的に」再構成するため新たな分析枠組みを構築する作業。

もちろん、現在の私には、この壮大な作業をすべてこなす力量はない。この短い紙面で、三つの作業のアウトラインを論じることもしない。ただ、三つの作業を進める際のいくつかのポイントを指摘し、問題提起としたい。

## 2. 家族社会学の解体と再生のために

### (1) 家族社会学の解体作業

現在、従来の伝統的家族社会学の分析枠組みでは、うまく処理できない現象に関心が集まっている。それは、分析枠組みの細分化や修正で済む問題ではなく、従来の伝統的家族社会学が暗黙の内に承認していた諸前提（背後仮説）をも脅かすものとなっている。ここまで「従来の家族社会学」という曖昧な形で述べていたが、その核心は、<sup>7</sup>

『家族は集団であり、一定の機能を果たす』

という前提である。この前提は、少教の例外を除けば、多くの家族社会学者の共有してきたものだった。家族制度論から始まり、役割構造論、構造機能主義、相互作用論から発達のアプローチに至るまで、この前提が背後仮説として忍び込んでいる。そし

て、なによりも家族「調査」の前提となってきた。

文化人類学や社会史の成果から、この前提は一種のイデオロギー、近代社会が生み出したイデオロギーであることがはっきりしてきた。それだけでなく、Bernardes が指摘するように、家族が「普遍的に存在する」、「自然である」という言明もイデオロギーであることがわかってきた。

何よりも重要なのは、背後仮説が明示化され、意識され出すという状況が出現していることだ。家族は集団であり一定の機能を果たすという前提では分析できない現象、これこそが今、現代社会で最も問題になる、つまり、現代らしさをよく表した現象だと思う。

家族の境界が曖昧になり、家族集団は客観的には確定できなくなる。

例えば、世代間関係（親夫婦、子夫婦の关系到典型的に現れる）の実態を見ると、それを客観的な基準によって二つの集団に分けることも、一つの集団にまとめることもできない。同居していても、家計は別、生活は別、情緒的にも別というケースがある一方、別居していても、家が近所だったり、食事は一緒だったり、家計を援助してもらったり、関係が密なケースがある。このような場合、集団としての家族の境界線を引くことは困難だ（家計集団は別で、情緒集団としては一つというように処理せざるを得ない）。結婚直後は別居し、時間がたってから親と同居するようなケースでも、別居していた期間、別の集団と処理してしまうと、見えない絆を軽視してしまうことになる。

これらの例は、人々の家族に込めている「意味の世界」の重要性を教えてくれる。関係が密に見えても家族と意識されない関係（例えば、仲の悪い嫁と姑）があるし、関係が疎に見えても家族と意識される関係（例えば、他家に嫁いだ娘と実母）もある。人々は、様々な相互行動や意味の世界の中から、自らの家族を主観的に構成し、自ら構成した意味に拘束され行動する。

家族の普遍的機能（要件）を特定することはできない。

家族が特定の機能を果たすという言明は一種のイデオロギーであり、①特定した機能を果たさない「家族」を病理や逸脱として処理する傾向が生じる、②特定した機能に関与する家族以外の多様な人々、機関、団体、国家などの役割を軽視する傾向が生じる。

例えば、家族の機能として、よくあるように「子供の社会化」を特定すると子供の社会化を果たさない、例えば子供のいない夫婦を逸脱と処理しがちであり、同時に子供の社会化に関わる多様な人々（祖父母、近所の人、ベビーシッター、保母など）、

機関（保育園、国家、マスコミ）などの役割を見えにくくする。あらゆる活動が、家族でも家族外でも行われるようになると、家族の機能という言い方がほとんど意味を失い、家族はある機能を遂行するための一つの利用手段にすぎなくなっている。それでも家族の機能を特定したがるのは、「家族はこうあってほしい」というイデオロギーの現れに他ならない。

## (2) 家族の現実をありのままに見る作業

「家族は集団であり機能がある」と言った途端、家族に人々が思い入れている意味世界と実際に行われる行動のシステムの世界が、アプリオリに研究者のイデオロギーが反映した形で結合してしまう。

家族には愛情が必要と思いながら現実に愛情を体験していない人もいれば、家族には愛情は要らないと思いながら愛情を実感している人もいる。老人は家族で見るべきと思いながら老人ホームに入る人もいれば、老人は自立すべきと意識しながら家族の世話を十分に受けている人もいる。

家族に関わる意味世界も多様なら、家族に関わるシステムの世界も多様であり、その結合の仕方も多様である。家族のあり方は、その家族の当人自身が決めているのであり、研究者が外から、家族はこのような意味があるとか、家族はこのような行動を遂行すべきだとか、家族ではこの行動はこのようにするべきだとか言ってみたところで、それは研究者の主観の反映にすぎない。家族の現実を知るには、人々のやり方をありのままに記述しなければならない。次の、三つの部分に分けることができる。

- ① 家族の意味世界の記述。「家族」という言葉にどのような意味を込めているのか、どのような期待を持っているのかを記述する作業。
- ② 家族がかかわる活動の記述。家族はどのような活動に関わっているのかを活動ごとに記述する作業（その際、家計集団、子育て集団、情緒集団、同居集団にズレが生じて構わない）。
- ③ 家族に関わる意味と活動の結合の記述。

## (3) 家族の分析枠組みの再構築

最後に、私が考えているミクロとマクロの家族分析枠組みを紹介しておきたい。

### ミクロの分析枠組み

家族の経験を、「家族」という意味が生成され、家族という意味で制御されるメカニズムとして把握する。親族の認知とか、愛情経験とか、共同行動の事実が家族という意味を発生させ、同時に、家族と意味付与することによって様々な行動が制御され、様々な体験が実感される。そして、このメカニズムはトートロジー的な所に特徴があ

る。「愛情があるから家族だと思う」「家族だから愛情が湧く」または、「同居しているから家族だ」「家族は一緒に住まなくてはならない」のように、家族に関する規則は、トートロジーを含んでいる。このトートロジーによって家族認知が維持されている。

#### マクロの分析枠組み

家族の世界を市場世界との対比で把握する。家族で体験される意味や家族で行われる活動は、常に市場世界との対比で語られる。例えば、愛情—打算、贈与—交換（意味）、子育て—物材生産、無償—有償（活動）など。二つの世界の分離を支え、二つの世界によって支えられている社会が近代社会だと考えられる。